

# 発刊の辞にかえて

水野弘元

仏教学部では、今年度から、従来の「駒沢大学仏教学部研究紀要」のほかに、新たに「駒沢大学仏教学部論集」を出すことになった。この両誌の区別については、「研究紀要」の方は純粋な学術研究論文のみを、しかも仏教学部教員のみのもに限って掲載することにし、これに対して「論集」の方は純粋な学術研究論文のほかに、仏教や禅の応用面としての教化や、現代思想・時事問題などに関する論文をも掲載し、しかもその執筆者は仏教学部教員だけでなく、仏教学専攻の大学院生、仏教学部生、短大仏教科生、その他、本学部の旧教員、他学部の教員、本学部卒業生、等というように、その範囲を拡げることにした。

さらに本誌の掲載事項としては、禅学・仏教学に関する新刊書や論文の紹介批評、内外の仏教事情の紹介、仏教学部に関する報告等の雑録をも加え、先輩諸氏との交流親善をはかることにも資したいと考えている。

従来仏教学部またはその前身で出していた刊行物には、この新刊の「仏教学部論集」の性格のものが多かった。新制大学になってからはその性格が失われ、仏教学部教員のみによる研究論文だけを掲げるようになった。ところで「仏教学部研究紀要」は今学年度の分は第二十九号となるのであるが、この号数はその性格や名称を異にした前身刊行物から通算したものである。そこで「紀要」と「論集」との関係を明らかにするためにも、これらの前身となった刊行物を刊行年度とその名称によって次に掲げることにした。

昭和	五年度	駒沢大学仏教学会年報	第一輯
同	六年度	同	第二輯
同	七年度	同	第三輯
同	八年度	同	第四輯
同	九年度	同	第五輯
同	十年度	同	第六輯

同	十一年度	同	第七輯
同	十二年度	駒沢大学仏教学会学報	第八卷
同	十三年度	同	第九卷
同	十四年度	同	第十卷
同	十五年度	駒沢大学学報	第一輯
同	二十六年	駒沢大学学報	復刊第一号
同	二十七年	同	復刊第二号
同	二十九年	駒沢大学研究紀要	通卷第十三号
同	三十年度	同	同 第十四号
同	三十一年	同	同 第十五号
同	三十二年	同	同 第十六号
同	三十三年	同	同 第十七号
同	三十四年	同	同 第十八号
同	三十五年	駒沢大学仏教学部研究紀要	第十九号
同	三十六年	同	第二十号
同	三十七年	同	第二十一号
同	三十八年	同	第二十二号
同	三十九年	同	第二十三号
同	四十年	同	第二十四号
同	四十一年	同	第二十五号
同	四十二年	同	第二十六号
同	四十三年	同	第二十七号

同 四十四年度 同 第二十八号

以上によって知られるように、右の表では二十九回の刊行であるが、最終は第二十八号となっている。（昨年度のが第二十八号となっているのは、昭和二十九年に出た「駒沢大学研究紀要」が通卷第十三号としたのを受けたのであるが、通卷第十三号の数え方が、実際は通卷第十四号とすべきを誤算したのではないかと考えられる。何となれば、昭和五年年度の「仏教学会年報」第一輯を起点とすれば、昭和十五年年度の「駒沢大学学報」第一輯は通卷第十一号、昭和二十六年年度の「学報」復刊第一号は通卷第十二号、その翌年度の復刊第二号は通卷第十三号となるべきであり、それに昭和二十九年年度の「研究紀要」が続くのであるから、これは通卷第十三号ではなくして、通卷第十四号とするのが正しいからである。しかし誤った通卷号が今日まで十数回にもわたって続けられて来ているから、今日ではこの号数に従うより仕方がない。）

名称にしても、昭和五年度の第一輯から同十一年度の第七輯までは「駒沢大学仏教学会年報」であり、昭和十二年度には「駒沢大学仏教学会学報」第八巻と改められ、これが第十巻に至るまで三年間続いている。以上の十巻は全学的なものではなく、仏教学会の機関紙として発行されている。その第一輯は、曹洞宗大学という専門学校が駒沢大学という大学令による大学へと昇格した大正十四年以後、第一回（昭和三

年)、第二回(昭和四年)の卒業生を出し、その中の宗門研究生によって結成された学士会が中心となり、教師や在学生が一体となって発行されたもので、有名な先生方のすぐれた論文が掲載されている。この活動は昭和十四年度の第十巻まで続いている。

昭和十五年度には、紀元二千六百年を記念し、大学昇格後十六年間の総括の意味で、仏教・東洋・人文の三学会合同の全学的規模で「駒沢大学学報」第一輯として出された。これは大東亜戦争に突入する寸前に刊行されている。本誌には大正十年度から昭和十五年度にいたる曹洞宗大学・駒沢大学卒業論文論題一覧や駒沢大学研究生学士会研究発表要目(昭和四年の創立から同十六年六月まで)が付録されている。やがて大東亜戦争に入って、研究も出版も不如意となり、十年以上の空白ができる。

昭和二十四年度から新制大学が発足し、やや落ち着きを回復し、形が整って来た昭和二十六年度に「駒沢大学学報」復刊第一号として全学的規模による小冊子が出され、第二号まで続けられたが、当時は用紙や印刷もまだ不自由であった。

やがて研究が軌道に乗って来たのは昭和二十九年度の「駒沢大学研究紀要」通巻第十三号からであった。それは仏教・文学・商経の三学部合同の全学的のものであり、この状態は六年間続いた。しかし論文の数も次第に増して来たので、昭

和三十五年度からは学部単位で「紀要」を出すことになり、仏教学部も「駒沢大学仏教学部研究紀要」として単独に刊行して今日に及んでいる。これは今後も続けられるであろう。そこには前述のように、仏教学部関係の教員の論文だけが掲げられ、それ以外の人々の論文も、研究以外の雑録類も掲げられていない。

これを前身の「仏教学会年報」や「仏教学会学報」のような形にもって行く必要性も痛感される。幸い今や仏教学部の教員陣容は益々充実して来たし、別個の刊行物を「駒沢大学仏教学部論集」として出す予算も計上されたので、この「論集」において、不足していた必要の部分を充足できるようになった。できれば花園大学における「禅文化」や大谷大学仏教学会の「仏教学セミナー」のように、学内だけでなく、学外にも広く読まれるようなものとして成長させたいものである。

なおこの「駒沢大学仏教学部論集」と駒沢大学仏教学会との関係について一言しておく必要がある。本誌の執筆者の範囲については前に触れたが、それは原則として仏教学会の正会員、準会員、賛助会員に相当する人々である。そこで仏教学会の成立や性格について一言しておきたい。

駒沢大学には新制大学発足以来、仏教学会が存在した。そ

これは仏教学部の学生を中心としたものであって、会長は仏教学部長であったが、仏教学部の教員や仏教学専攻の大学院生などは顧問格や指導助言者としての従的な立場におかれていた。仏教学部の学生はすべて必然的に仏教学会の会員となつて、義務的に会費が払わせられ、その運営は正会員である学部学生に一任され、学生の論文等を掲げた学会誌も学生の手で発行されていた。昭和四十二年度に「仏教学会誌」第十号が出され、仏教学部の消息や「昭和四十二年度卒業論文論題並指導教授」の表示などを付録している。

ところが昭和四十三年に、全学連による学園紛争が生じ、駒沢大学でもその六月五日に総長と学友会、学部学会（全共闘）との間に、七項目の確認事項が取り決められ、その中に学部別自治会設立承認、学部学会は研究機関として任意加盟、という項目があるので、仏教学会は学生の全員加入を義

務付けられることなく、自由意思による任意加盟となり、これに代るものとして学部自治会という全員加入の組織が作られることになった。

この確認事項によって、仏教学部でも学生全員加入の仏教学部自治会が昨年度に正式に成立発足し、従来の学生中心の仏教学会は解散することになった。（昭和四四・五・二二日）

仏教学会の存続の必要を感じた仏教学部教授会では、学生中心の仏教学会の解散の後を受けて、教員中心の新しい仏教学会を発足させることになり、その年の九月十二日の仏教学部教授会で会則を決定承認した。会則にある事業の一としての学会誌刊行をこの「論集」刊行に該当するものと見ることにした。つまり「駒沢大学仏教学部論集」は「仏教学会誌」に代るべきものと見られるべきである。